

源義亮の著述活動

——『源語類聚抄』（広島大学蔵） 解題補遺——

岡 陽 子

稿者は先に「^刻平安文学資料稿」第三期第十卷『源語類聚抄』（広島大学蔵）下（平15・6）の解題執筆を担当した。その際に、『源語類聚抄』の編者である源義亮について考察を加えたのであるが、『補訂版 国書総目録』で知れる著作六点のうち三点は未見であった。しかしその後、これらについて調査の機会を得、これにより現在知られる彼の著作全てを調査し終えたため、ここで改めて源義亮という人物について報告しておきたい。

* * * * *

まず確認のため、改めて『補訂版 国書総目録』から著作を挙げておく。

- (1) いそのかみ 一冊 ②以曾農智美・万葉冠字集 ③語彙 ④源義亮 ⑤安永八自序、寛政一〇年刊 ⑥東大（一卷二冊）
⑦国会・東博・京大・東大・東北大狩野・無窮平沼

(2) 雲上再営うんじょうさいえい 一冊 ⑧白蓮社空阿 ⑨寛政五下道郷

・著者奥書 ⑩旧浅野

(3) 冠辞かんじいそのかみいそのかみ 一冊 ⑪語学 ⑫空阿編 ⑬寛政一〇

年刊 ⑭国会

(4) 国風随くにかぜのまにのまにのまにより 一冊 ⑮和歌 ⑯源義亮 ⑰宝暦二年奥書

竹柏

(5) 月名考げいめい 一冊 ⑱語学 ⑲白蓮社空阿 ⑳安永一〇 ㉑

岩瀬

(6) 佐賀美路乃記さかみちのき 一冊 ㉒さがみちの記 ㉓地誌 ㉔空阿

⑵安永六 *地誌目録による

(7) 廟陵考ぼらうこう 三卷 ㉕源義亮編 ㉖京大（天明七写、大和国

廟陵岡井代々同記・廟陵を付す、五冊）

前稿同様、便宜的に通し番号を付したが、このうち(1)と(3)とは同じ版本であることが確認でき、実質的には六つの著作といえる。これらのうち、今回は(4)、(5)、(7)について報告するものである。

(4) 国風随（写本一冊。天理図書館蔵）

外題「國風隨」（題簽左肩）。内題「國ふりのまに」。「竹柏園文庫」印あり。

本書については前稿で引用したように、佐佐木信綱氏編『竹柏園蔵書志』（昭14初版、昭63復刻版・臨川書店）に次の記載がある。

内題に、「國ぶりのまに」とあり。歌會書式に就きて、武者小路實岳に聞ける説を記せるもの。奥に、「寶曆二年壬申文月十八日源義亮良明誌（花押）」とあり。

和歌作法や懷紙のあり方について図解入りで説明したものである。

(5) 月名考（写本一冊。西尾市岩瀬文庫蔵）

外題「月名考 全」（題簽左肩）。「岩瀬文庫」「金子図書」印あり。

最終丁裏に「藤忠庸藏書」とあり。

本書の内容については、安永十年の義亮序文に説明がなされている。友人たちの訪問を受け「月の名」について質問されたという経緯を記したのち、次のようにある。

こやいなふねのいなといはんもはたをこかましく筆とりておもへは。から国の名。また御異やうなる月の名も。今の人のかれこれいふめるをのみこゝにします。（略）中にも我ふみ見る常の友かきの。たひらのたかきよのぬしも。この頃人のもとのまにく月の名をあげつろひをきたると聞えぬ。（略）

安永十年正月十六日 白蓮社空阿誌

傍線部にあるように、本書では日本書紀、和名類聚抄、和歌（凡河内躬恒秘藏抄、俊頼朝臣莫傳抄など）、下学集等から十二ヶ月の異名に関する記載を取り上げた後、「今案」として義亮の考えがまとめられている。その後、日名、年名、十二支考などが続く。「義亮按に」「義亮再考」という記述も複数見え、広島大学蔵『源語類聚抄』に

おける義亮自らの考えを書き付ける際のあり方と共通している。

またこの序文では「中にも我ふみ見る常の友かきの。たひらのたかきよのぬし」として小野高深の名が挙げられている。ここからも前稿で他資料によつて確認したとおり、高深と学問的交流があったことが認められ、「常の」とあることからよほど親しい間柄であったものと推測される。

(7) 願陵考（写本三冊。京都大学文学部蔵）

外題「願陵考」（表紙中央打付書）。

見開き二面で一つの陵墓について記してある。それぞれ天皇名・陵図（多彩色）・陵図解説が書かれている。また随所に朱で頭注がなされており、「享保陵考云」「享云」「義亮按」「亮按」などが見える。奥書に

そらみつやまとの国にますおほみさゝきの御山のかたちは竹叢主人ひめ置たりしをふるき友かきのよしみにこひえて見る事ひとひらなるもありまたふたひらなるもあなりてそのさとくよりしるしつけたるまゝにうつしものしたる也（略）

天明七年丁未十一月廿日

西郊盤溪空阿源義亮良明（花押）

このみさゝきの図考空うしの白蓮社にこめ置れしをせちにこひて更行あきの夜なかきをりにしあなれはともし火のもとにてしるしつけぬ

寛政三年九月廿日

日下文庫

とあることから、竹叢主人から借りた複数の記録を書写したこと、さらにそれをかなり近い時期(寛政三年)に転写したのが現在の京都大学蔵本あるいはその祖本であることが確認できる。

なお、ここで記されている「竹叢主人」とは(5)にも名の見えた小野高潔あるいはその父である小野高尚(享保五(一七二〇)〜寛政十一(一七九九))を指すと思われる。

高尚は宝暦一三年(一七六三)家督を嗣ぎ、明和二年(一七六五)幕府大御番となる。天明四年(一七八四)致仕。国学・歴史に通じた。(以上、『国書人名辞典』による)

高尚・高潔は父子ともに「竹叢」を名のっているが、高尚存命中であることを考えると、ここでいう「竹叢主人」は高尚と見るべきであろうか。その場合、「ふるき友かきのよしみ」ということから、友人(高潔)の父として親しんだのではなく、元来は高尚と親しく交流しており、そこから子・高潔とも親交を結んだということになる。とすれば義亮の年齢はこの父子の間くらいということになる。うか。

ただ、高潔と義亮との交流は複数資料により確認できるが、父・高尚との関わりはこの『廟陵考』にしか見えない。また『廟陵考』の天明七(一七八七)年よりも前に、『続日本紀』の会説を共に行い(神智文庫蔵本、安永三(一七七四)〜五(一七七六)年)、「やつことおなしみちとにもわける平の朝臣たかきよ」(いそのかみ)

安永八(一七七九)年自序)、「常の友かきのたひらのたかきよぬし」(『月名考』安永十(一七八一)年自序)と記しているため、高潔も「ふるき友かき」と呼ぶに値するといえる。なお検討すべき問題である。

* * * * *
以上三冊によつて確認できたことを補い、改めて源義亮年譜を作成すると以下ようになる。

宝暦二(一七五三) 七月、『国風随』奥書を記す(天理図書館蔵本)

明和六(一七六九) 七月、山岡俊明より『和字正濫要略』を借りて書写する(静嘉堂文庫蔵本)

安永三(一七七四) 十一月より日下部勝臯・小野高潔・金子尹庸・平長貞と共に『続日本紀』の会説を行う(神智文庫蔵本)

五(一七七五) 三月、『続日本紀』の会説を終える(同右)

六(一七七七) 『佐賀美路乃記』を著す(『補訂版 国書総目録』)

八(一七七九) 正月、『いそのかみ』序文を記す(寛政十年版本)

十(一七八一) 正月、『月名考』を著す(岩瀬文庫蔵本)

天明二(一七八三) 正月、日下部勝臯より『しのびね』を借りて書写する(国立国会図書館蔵本)

三(一七八五) この年以後、『源語類聚抄』を著す

六月、日下部勝臯に『驛路鈴の圖』を貸す(安藤

菊二氏「奈佐隅東」日本書誌学大系39『江戸の和学者』昭59・青裳堂書店

四（二七四）

二月、吉邑正敏（詳細は不明）から三輪神社蔵の神代文字を借りて書写する（平田篤胤『神字日文傳』下）

五（二七五）

十一月、『神代文字』を小野高潔より借りて書写する（静嘉堂文庫蔵本）

天明七（二七六）

十一月、竹叢主人より借りた複数の記録を『廟陵考』としてまとめ書写する（京都大学文学部蔵本）

寛政三（二七九）

九月、日下氏に『廟陵考』を貸す（同右）

寛政五（二八〇）

『雲上再宮図』奥書を記す（補訂版『国書総目録』）

寛政十（二八九）

『いそのかみ』刊行される（寛政十年版本）

前稿では「江戸幕臣文化圏において安永から天明期を中心に活躍した人物」と推測を述べたが、小野高尚との交流の可能性および『廟陵考』を寛政三年に貸していることが明らかになったため、やや幅を広げ「明和から寛政前半」を中心に活躍したと見ておきたい。

今回の調査では広島大学蔵『源語類聚抄』そのものに関する情報は得られなかったが、その編者である源義亮の著述活動についてはより明確になったと思われる。よって、解題補遺として報告した次第である。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程後期在学——